

『銀河鉄道の夜』の「ケンタウル祭」

家 井 美千子

はじめに

宮澤賢治が晩年までその世界を完成させることなく残した童話『銀河鉄道の夜』は、これまでも夥しい数の論考がなされている魅力的な作品である。

このことは、この物語世界の「わからなさ」が多くの読者を考察に誘っている、とも言えよう。しかしそのわからなさの中には、宮澤賢治が生活した社会の特質に起因するものがあり、それが現代には見えなくなっているからかもしれない、と近年考えるようになった。

宮澤賢治の詩を理解するのに、当時の花巻を中心とした岩手の人々の言葉遣いを知ることが不可欠のように、賢治のあたため続けた『銀河鉄道の夜』の世界の理解に、その当時の岩手の風土を知ることが重要ではないか、と思いはじめたのである。

現在私の住む盛岡や時折訪れる花巻は、宮澤賢治が学生時代を送った盛岡や花巻とはおそらくずいぶん変わってはいるが、それでもどこかに同じ空気が残っているのではないだろうか、と思っている。

本論は、他の地域からやって来て盛岡に住み着き、その生活の随所にそれまで感じなかった「宮澤賢治的であるもの」に気付き、それによって『銀河鉄道の夜』の読みに新たな観点を見出した者としての報告である。

なお『銀河鉄道の夜』については、亡くなる直前まで賢治が「本文」を確定させなかったため、本文や「作品」の成立(成長?)をめぐって様々な考察がなされている。本論ではこのことについて触れえないが、考察の中心は、「ケンタウル祭」とは何かであり、この行事については第一次稿から第四次稿まで物語世界の基盤として存在しているので、本文の変遷や「構想の進展・変化」とは関連させず、第四次稿の本文をもとに論じたい。¹⁾

『銀河鉄道の夜』の昼の世界と夜の世界

『銀河鉄道の夜』は、現在第一次稿から第四次稿(最終形)までの存在が確認されているが、この物語で起こることの背景には、最も早いとされる第一次稿から「ケンタウル祭」と呼ばれる行事があることが確認できる。

注目すべきはそれがジョバンニが住む町の現実の祭りであるとともに、ジョバンニがカムパネルラと共に旅した銀河鉄道の通過する地域にもまた行われていることである。つまり、「ケン

1) 以後『銀河鉄道の夜』本文は、ちくま文庫版宮澤賢治全集第7巻(1986)により、ページ数を示す。

「タウル祭」は、ジョバンニの住む町（昼の世界、以下〈昼〉）にも、「銀河鉄道」の沿線（夜の世界、以下〈夜〉）にも同時に行われている行事であるといえる。

しかし、もちろん『銀河鉄道の夜』においては、〈昼〉と〈夜〉は全く同一のものではありえない。日常的な感覚で言えば、『銀河鉄道の夜』の〈昼〉と〈夜〉は、現実と夢の中と言い換えることができる。

第四次稿で言えば、「五、天気輪の柱」でジョバンニは眠ってしまい、銀河鉄道で同行していたカムパネルラの姿を見失って泣きだしたところで、目を覚ます。従って先に述べた〈昼〉は物語の現実世界であり、〈夜〉はジョバンニの眠りの中の夢の世界とも言うことができる。そして、実際の現実と夢の関係のように、『銀河鉄道の夜』の〈昼〉と〈夜〉にも、いかにも夢らしい対応のゆがみが描かれている。

〈昼〉の「一、午後の授業」から「五、天気輪の柱」までで語られるさまざまな事物が、あとで旅する銀河鉄道でジョバンニが体験したり見聞きしたことに、かたちを変えてあらわれていることはすぐに読み取ることができよう。たとえば「三、家」で、

ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄った。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があったんだ。レールを七つ組み合わせると円くなってそれに電柱や信号標もついてる信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるやうになってるんだ。

(241ページ)

という、母に語るジョバンニのことは、そのまま銀河鉄道全体のイメージをかたちづくるものとなっている。

また、学校で先生の説明したことや、ジョバンニが町で見かけた「星座早見」などもまた、〈夜〉の銀河鉄道沿線のイメージを立ち上がらせるものとして描かれているであろう。

ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。(中略)

いちばんうしろの壁には空ちゅうの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図がかかってゐました。ほんたうにこんなやうな獣だの勇士だのそらにぎっしりゐるだらうか、あゝぼくはその中をどこまでも歩いて見たいと思ってたりしてしばらくぼんやり立って居ました。

(244ページ)

しかし、この二つの世界は対比的な描かれ方であるとともに、実は物語の進行（物語内の時間の進行）に沿って、〈昼〉の中に〈夜〉が少しずつ入り込んでいくように構成されている。

たとえば、冒頭の「一、午後の授業」で教師の説明した「銀河」のイメージは、その晩が「銀河の祭り」の当日であるために、ジョバンニの移動とともに「飾られた街」のそこここにあられる。しかしここで注意すべきは、それが「水中」の印象も伴うことである。

空気は澄みきって、まるで水のやうに通りの店の中を流れましたし、街灯はみなまっ青なもみや檜の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタナスの木などは、中に沢山の豆電燈がついて、ほんたうにそこらは人魚の都のやうに見えるのでした。

(244ページ)

この、水中のイメージは、「五、天気輪の柱」の丘からぼんやりと眺める眼下の街の描写にいたって、「海の底」に喩えられるに至る。

町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのやうにともり、子供らの歌ふ声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞えて来るのでした。(247ページ)

このように、ジョバンニの目には水の底にあるように見える町から、彼が眼を転じて「遠く黒くひろがった野原を見わたし」たとき、汽車の音が届くのである。

そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は一列小さく赤く見え、中にはたくさんの旅人が、苹果を剥いたり、わらったり、いろいろな風にしてゐると考へますと、ジョバンニは、もう何とも云へずかなしくなつて、また眼をそらに挙げました。

(248ページ)

ここに汽車が登場するのだが、ジョバンニがこの時既に眠りに入っていたのか否か、といった議論は別にして、「また眼をそらに挙げました」からは、ジョバンニがこの汽車の走る野原をも見下ろしていたことがわかるのである。つまり、眼下に見える町や野原に対して、眼を挙げて見る空は、ジョバンニにとってそれぞれが上方と下方の対極的な位置にある。しかし、町や野原の反対側に位置するはずの空は、まるで野原の鏡像のようにジョバンニには見られるのである。

あゝあの白いそらの帯がみんな星だといふぞ。

ところがいくら見てゐても、そのそらはひる先生の云つたやうな、がらんとした冷いとこだとは思はれませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やらある野原のやうに考へられて仕方なかったのです。そしてジョバンニは青い琴の星が、三つにも四つにもなつて、ちらちら瞬き、脚が何べんも出たり引っ込んだりして、たうとう輩のやうに長く延びるのを見ました。またすぐ眼の下のまちまでがやっぱりぼんやりしたたくさんの星の集まりか一つの大きなけむりかのやうに見えるやうに思ひました。(248ページ)

こうして、ジョバンニはおそらくは夢の中に入つて行くのであるが、それは「眼の下のまち」を、先ほどまで対極の位置にあつた銀河の星の帯に幻視することでもあつた。いわば、〈昼〉の町に〈夜〉の銀河鉄道が重ねられるところから、ジョバンニの銀河鉄道の旅は始まつているのである。合理的説明をすると、眠りかけたジョバンニの目に映る町や野原のようすが、夢の中の「銀河鉄道」に姿を変えて再登場するということになる。

しかし、「六、銀河ステーション」以降でジョバンニが旅する世界は、〈昼〉とはずいぶん秩序が異なつてしまつていて、ジョバンニは当初そのことにとまどつてゐる。にもかかわらず、ジョバンニは旅の途中で「ケンタウル祭」が行われている「ケンタウルの村」にさしかかると、今夜がケンタウル祭であることをごく自然に納得しているのだ。

このように『銀河鉄道の夜』の世界を〈昼〉と〈夜〉との関連として見つめ直すと、二つの世界がお互いに鏡に映る像のような関係にあるとともに、〈昼〉が途中から水中のイメージで語られることがわかり、また「ケンタウル祭」が〈昼〉と〈夜〉をつなぐ物語世界の重要な基盤であることがあらわれてくると考えられるのである。

ケンタウル祭

それでは、〈昼〉と〈夜〉に共通する町の行事としてのケンタウル祭はどのようなものなのか、第四次稿に描かれたところから見ていくことにする。

まず、〈昼〉の行事としてのケンタウル祭について、たどってみよう。「一、午后の授業」で、銀河についての学問的説明をした学校の先生は、最後にこのように子どもたちに言う。

「今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらん下さい」

(237ページ)

これはむしろ、この日が「銀河のお祭」であるからこそ、学校の先生が機会を捉えて銀河についての説明をしているのだと考えて良いだろう。

しかし、先生の説明は科学的な銀河の存在についてであって、町の行事がどのようなものであるのかは、全くわからない。

「よくそらをごらん下さい」も、行事の一環としての当然の行動であるからなのか、それとも行事をきっかけに子どもたちに銀河への興味をかき立てるために勧めているのか、定かではないのである。

行事のようすは、移動するジョバンニの目に映る事物として、断片的に描かれている。

それは「二、活版所」で、(後で判明することだが)母を養うために働きに行かなければならないジョバンニとは対照的に、同じ組の七八人が「こんやの星祭に青いあかりをこしらへて川へ流す烏瓜を取りに行く相談」(237ページ)をしていると推測するところや、活版所に急ぐ途中でジョバンニが見る「町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちむの葉の玉をつるしたりひのきの枝にあかりをつけたりいろいろ仕度をしてるのです。」(237ページ)などである。

また「三、家」で、ジョバンニに対して母が「川へははひらないでね」(242ページ)と注意しているところにも、この行事の何らかの性格が顕れていると思われる。

この母の忠告は、先の「川へ流す烏瓜」と関わっているといちおう考えられる。物語の最後で、ザネリが川に溺れることになる原因が、烏瓜を遠くまで流そうと舟から身を乗り出しすぎて川に落ちたためであることが語られるが、ジョバンニの母は、おそらく息子も烏瓜を流そうとする、と考えたのだろうか。あるいは烏瓜を流すことを禁止しているのだろうか。

母の忠告に対してジョバンニは、「あゝぼく岸から見ただけなんだ。」と答えている。この対話の前でも、ジョバンニは烏瓜を取りに行きたいとは全く言わないし、烏瓜を流そうとする意志があるようにも見えない。烏瓜のあるなしに関わらず、川に入ることを禁じられている、とも読める。

ともあれ、これまでに引用した描写などによって、〈昼〉のケンタウル祭とは、少なくとも以下のような行事であると言える。

- ・子どもたちが、烏瓜をあかりとして川に流す。
- ・それを川岸で見物する人々がいる。
- ・家ごとに「いちむ」やヒノキなどの木の枝で飾りをつける。また、飾りには灯りもともされる。

・祭りは、「星祭」とも「銀河の祭」とも呼ばれている。

このほかに、さらに「空の星を見る」、「川へはいる」という行動が含まれる可能性が考えられるであろう。

そして、「四、ケンタウル祭の夜」にはいると、次々と町の祭りのようすがジョバンニの目にうつされる。

ジョバンニは、せはしくいろいろのことを考へながら、さまざまの灯や木の枝で、すっきりきれいに飾られた街を通って行きました。(243ページ)

空気は澄みきって、まるで水のやうに通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまっ青なもみや檜の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタナスの木などは、中に沢山の豆電燈がついて、ほんたうにそこらは人魚の都のやうに見えるのでした。子どもらは、みんな新しい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、「ケンタウルス、露をふらせ。」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃やしたりして、たのしさうに遊んでゐるのでした。(244～245ページ)

町の中心らしい場所では、街燈が緑の葉の枝で包まれ、街路樹の「プラタナス」までが豆電燈で飾られている。この引用文に先立つ箇所で、時計屋のウィンドーの「星座早見」はアスパラガスの葉で飾られており、それらに加えモミヤヒノキ・ナラなどの木の枝の緑と、木の枝につけられた灯り（電燈）の光とが、この祭のきわだった装飾であることがわかる。

また、子どもたちが新しい衣類を与えられ、歌を歌ったり口笛を吹いたり、花火をしたりするのも一般的な祭らしさであろうが、ほかの一般的なハレの行事に対してこの祭を特徴づけるのは、おそらく「星めぐり」の歌があることと、「ケンタウルス、露をふらせ。」という特別な決まり文句があることであろうと思われる。

祭の名が「ケンタウル祭」であるのだから、この決まり文句は当然とも言えるが、しかし、「ケンタウル祭」という名称が、星祭または銀河の祭であることとはどのような関連があると考えべきなのだろうか。また、「ケンタウルス、露をふらせ。」とは、何を意味しているのだろうか。

これについては、何も説明されていないと言って良いだろう。物語は、自明のこととして「ケンタウル祭」を描き、その祭で子どもらは当然のこととして「ケンタウルス、露をふらせ。」と叫ぶのである。そして、町は木の枝の緑と光の飾り付けで美しくなるが、それが「ケンタウル」と何の関連があるのか、全く不明である。

一方で、〈夜〉の銀河鉄道では、「ケンタウル祭」はどのようなものであったかといえば、ジョバンニの銀河鉄道の旅が半ば以上を過ぎ、「蠟の火」を見た後にあらわれる以下のような場面に見ることができる。

その火がだんだんうしろの方になるにつれてみんなはなにも云へずにぎやかなさまざまな楽の音や草花の匂のやうなもの口笛や人々のざわざわ云ふ声やらを聞きました。それはもうちきちかくに町か何かがあってそこにお祭でもあるといふやうな気がするのでした。

「ケンタウル露をふらせ。」いきなり今まで睡ってゐたジョバンニのとなりの男の子が向ふの窓を見ながら叫んでゐました。

あゝそこにはクリスマスツリーのやうにまっ青な唐檜かもみの木がたつてその中にはたくさ

んのたくさんの豆電灯がまるで千の蛍でも集まったやうについてみました。

「あゝ、さうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」

「あゝ、こゝはケンタウルの村だよ。」カムパネルラがすぐ云ひました。 (288ページ)

全く残念なことには、この後に現存の原稿に不備があるらしいことが指摘されている。²⁾ このため、今見るかぎりの『銀河鉄道の夜』において、銀河鉄道の「ケンタウルの村」におけるケンタウル祭に関しては、これ以上の情報は無い。

しかし、第四次稿のこのような描写からは、〈夜〉の世界のケンタウル祭が、〈昼〉とほとんど変わりのないことが見て取れよう。

つまり、〈昼〉で見られた、口笛などの音楽、緑の木の枝と豆電燈（あかり）、そして男の子の叫ぶ「ケンタウル露をふらせ。」という決まり文句である。この断片的な描写の中に、〈昼〉との違いを見るとするのであれば、烏瓜の灯りが全く見られないこと、この行事が星祭または銀河の祭であるかは不明であることであろう。もっとも後者については、祭の場所がもともと「銀河」である以上、無意味な詮索かもしれない。どちらであるにしても、描写がないことをもってその根拠とすることはできない。

それよりは、まことに微細な違いではあるが、緑の木につけられた豆電燈の多さが「たくさんのたくさんの」と繰り返されて強調されていることに注意すべきかもしれない。祭りの場が銀河であるだけに、〈昼〉の世界よりもさらに光り輝く華やかな飾りが施されていることを表現している、と考えることも可能であろう。

ともあれ、こうした風景を見て、ジョバンニはすぐさま今夜が「ケンタウル祭」であることを思い出し、星座盤をもつカムパネルラもここが「ケンタウルの村」であることを了解するのだ。

彼らの了解の根拠がなんであるのかは、読者には全く説明されない。私たちは、物語に示された「ケンタウル祭」を、ただ示されたとおりに読み進めるしかなく、今わかるのは、それが〈昼〉においても〈夜〉においても同様の祭らしい、ということだけだ。

それでは、この「ケンタウル祭」の内容は、読者個々の想像力に任せられている、と考えるべきなのだろうか。

かつて私はそのように感じていたのだが、盛岡に住むようになってしばらくして、この「ケンタウル祭」は、明らかに岩手県の（または宮澤賢治が生きた時代の日本の各地の）夏の伝統行事を踏まえているのではないか、と思うようになったのである。

岩手の旧盆行事

『銀河鉄道の夜』の〈昼〉の世界の季節がいつであるのかは、明示されているわけではない。それを考えるためには、ジョバンニが家で食べるトマトや川に流す烏瓜、またはジョバンニの見る空の星の位置などから推定可能かもしれない。

かつて私は、漠然とした読後の印象として夏の終わりから初秋のイメージを抱き、さらに主として「川に烏瓜を流す」ことと灯籠流しの類似から、旧盆行事なのではないか、との感覚的な読みを行っていた。

2) 文庫版全集は、この文の後に「以下原稿一枚?なし」とする。

そして岩手に住むようになって以降、この地域独特の盆行事を少しずつ見聞きする中で、「ケンタウル祭」は旧盆行事を踏まえたものではないか、という確信が強くなってきている。

現在ではかなり賢治の生きた時代と異なってしまっているのであろうが、少しでも近い時代の証言として、花巻近辺の旧盆行事を語るものをあげてみよう。

昭和42年に発行された『花巻市史』³⁾ 民俗編には、以下のように二つの地区の旧盆行事が紹介されている。

(成田地区)

七月七日 なのか日

朝飯前より墓掃除をする。井戸浚い(井戸かき) 子供等は七度小屋飯を食べて水泳ぎをする。又ハット自家でつくったそうめんを食べる。

七月十三日十四日 法会

各家の氏によって十三日、十四日と違う(墓参日) 先づ墓碑の前に棚をつくり、上に芦ずをしき その上に蓮の葉を置き それに赤飯 昆布 てん其他を供えて 一同墓参りを行う。

七月十四日 盆入

今日から十六日まで盆 外に二十日盆 送り盆とある。年回忌仏 新仏のある家では庭先に長い灯籠木をたて、夜はあんどんに火をとぼして長い先につりあげる。

(矢沢)

七日 七日日 墓の掃除をし、ほうかいの時供物をのせる棚をつくる。子供らは七回水泳ぎをする。夜は素麺を食べる家もある。

七夕祭 最近七夕まつりが復活されてきた。

ほうかい (略)

盂蘭盆 十四、十五、十六日の三日ほかに二十日盆送り盆などがある。墓や門に焚き火する故人の周忌に当る家では灯籠木をたて盆中灯をつける。家から寺まで供養する家もある。灯籠流しは十六日にやる。近ごろ盆踊りが盛んになって来た。

同書には以上の叙述のほかに「年中行事」と題された章があり、これは解説によれば「東和町小山田石鳩岡における明治二十年(一八八七)ころのものである。郷土史家一ノ倉則文氏が、こうしたことのすたれるのを思い昭和二年(一九二七)に記しておいたものである。」とのことで、地域が少し異なるが、そこにも「七日日」(ナノカビ)の項(ただし、子どもの水浴に関しては、無い)や十四日の墓参などが共通している。盆中の灯については、十四日の項の記事では以下の通りである。

火は家の門にてもたく是れを門火(カドビ)と云ふ墓にて炊くは迎火と云ふ すべて麦稈二 三把をたく 親類其他の人々お念仏を唱ふる事朝に同じ

又新仏のある家など灯籠木と称し高き長木の先きに杉の葉をつけ又蠟燭或はかんてら(小サキ石油ランプ)を入れたる行灯を吊し目印となす これは大抵家の前に建てる又墓場或は墓に行く道に四十八灯籠と称し四十八ヶの提灯又は絵行灯をつける也

3) 熊谷章一編 花巻市教育委員会発行 昭和42年(1967)

家々にては戸を開き提灯を吊し仏前にはお灯明をともして賑やかに霊祭りを為す也

つまり、花巻の東隣りの東和町で明治20年ごろの行事としてあったものと同様のことが、昭和42年の花巻にも残っていたことになろう。

さらに、大正12年7月17日生であることを明記して書かれた鎌田博氏のまとめられた『ふるさとのむかしの生活と年中行事』⁴⁾では、花巻市湯本における同じ行事を以下のように記録している。

七月七日（なぬかび）

迎え火 灯籠

迎え火、送り火は門火とも言い、祖霊の通る道を明るくするためと言われ、門口と墓石の前にも焚く。送り火は十六日に行われ、灯籠流しはその変形である。

新仏のある家では家の前に長い竿を立てその先に灯籠をつける。四十八灯籠と言って門口に灯籠を四十八ヶ並べてつける。

これらの記録からわかる花巻近辺の旧盆行事は、次のようなものである。

- ・七日が盆行事の開始であり、迎え火を焚く。また、子どもたちが水浴することがある。
- ・新仏（または周忌）のある場合は、「灯籠木」と呼ぶ特別な灯明をつける。
- ・灯籠木のほかに四十八灯籠と呼ぶものをつけるところがある。
- ・全体として霊祭りのために、多くの灯明をとます。
- ・送り火、または灯籠流しをする。

こうした記録から、宮澤賢治の生活した時代の旧盆行事が推測されよう。彼の生きた時代に、電気はもちろんすでに引かれていて、電燈もあったであろうが、その使用は制限されたものであったと思われる。従って通常の夜は現在と異なって非常に暗かったであろう。それに比べ旧盆の際は、灯明の多さによって当時の人々にとって特別に明るい夜だったのではないだろうか。先に引いた「年中行事」の「賑やかに霊祭りを為す也」は、その感覚を伝えているのであろう。

『銀河鉄道の夜』の「昼」のケンタウル祭では、町に溢れる光が描写されるが、その光源は緑の木の葉に包まれた街燈であり、子どもたちのもつ烏瓜の「あかし」であった。これらが、花巻近辺の「四十八灯籠」や「灯籠流し」に近いものであることは確かである。

さらに、このような岩手県の旧盆行事の観察者として、柳田國男をあげることができる。柳田の『雪国の春』所収の「豆手帖から」には、以下のような記述がある。⁵⁾

江戸では青山辺の御家人等が、近世まで盆の月には高灯籠を揚げて居た。將軍某駒場の狩の帰るさに、其光の晴夜の星の如くなるを賞でたと云ふ話が遺つて居る。それが多分御一新の変化から、一様に軒先の切子灯籠と為り、更に転じては岐阜提灯の水色と為つて、おまけに夏の央には引込めてしまふ故に、所謂秋のあはれまでが、今では此様に個人化するに至つたのである。百年前の秋田領風俗問状答書の絵に見えて居る通りの昔風の灯籠は、陸中に入

4) 花巻市湯本公民館 平成15年(2003)2月 発行

5) 筑摩書房『定本 柳田國男全集』第2巻 昭和43年(1968)

つてから次第に之を見掛けるやうになつた。寺の境内に立てた高い柱には、昼の間は白い幡を掲げて置く例も有るが、尋常民家の灯籠木に至つては、何れも先端を十字にして、杉の小枝を三房結はえてある。以前は其の木が必ず杉であつたことを、是だけでも示すのみならず、村に由ては今なほ天然の杉の木を、梢ばかり残して柱にして居るものさへ有つた。

今では不幸の有つた翌々年の盆まで、此灯籠は揚げる習ひに為つて居る。空を往来する精霊の為には、誠に便利なる濫標であるが、生きた旅人に取つては此程物淋しいものは無い。殊には白い空の雲に、又は海の緑に映じて高く抜け出で、立つのを見ると、立止つては此等労働に始終した人々の、生涯の無聊さを考へずには居られなかつた。閉伊の吉里吉里の村などは、小高い處から振返つて見ると、殆ど一戸として灯籠の木を立てぬ家はない。どうして又此様な夥しい数かと思ふと、やはり去年の流行感冒の為であつたのだ。

柳田のこの文章は、大正9年8月から9月に東京朝日新聞に連載したものをもとにして成つていて、同年夏の三陸旅行の記録である。

『柳田國男全集』月報⁶⁾の松本信広「東北の旅」によれば、上記の見聞は以下のような旅程から得たものであつた。

柳田先生は仙台を起点として海岸沿いに北上の旅を重ね、一端遠野にこられ、私をおつれになり、また赤羽根峠を越えて南下され、陸前の海岸に出、獺沢の貝塚に佐藤さんを尋ねたり、岬の突端に尾崎神社に詣でたり、また大島にわたり、村役場を訪れたりされたのであつたが、最後に気仙沼から舟で釜石にわたり、そこで遠野の佐々木さんを一行に加え、総勢三人でいよいよリアス式の登り下りの多い海岸道を一路青森八戸の辺まで向うことになつたのである。

つまり、柳田の記録した「秋田領風俗問状答書の絵に見えて居る通りの昔風の灯籠」を見たのは、岩手県沿岸のことであつたと思われるのだが、その形状が内陸の花巻近辺のものと異なつていたとは思われない。

なぜなら、先に引いた「年中行事」にあつた記述の「灯籠木と称し高き長木の先きに杉の葉をつけ又蠟燭或はかんてら（小サキ石油ランプ）を入れたる行灯を吊し目印となす」と、柳田の「何れも先端を十字にして、杉の小枝を三房結はえてある。以前は其の木が必ず杉であつたことを、是だけでも示すのみならず、村に由ては今なほ天然の杉の木を、梢ばかり残して柱にして居るものさへ有つた。」とは、同じ状態のものを記録していると思われるからである。

柳田の描写の方が詳しいが、これは、現地の人々にとっては形状が自明のもので、詳しく描く必要を感じなかつたのに対して、柳田が観察者・記録者として厳密な表現を目指しているからであらうと思われる。

また、柳田が述べているように、こうした風習は陸中に限つたことではなく、かつては江戸でも行われ、また日本海側の秋田にも行われていたことは、彼の指摘する『秋田領風俗問状答書』の記述からも明らかで、広く日本中にあつたものである。『秋田領風俗問状答書』の記述は以下のようなものである。⁷⁾

6) 筑摩書房『柳田國男全集』第2巻に付録。

7) 三一書房『日本庶民生活資料集成』第九巻 1969 なおこれに付属する絵は、秋田県立博物館所蔵。

七月

此月、高灯笼造立候に、ことにのびよき丸太の三丈、四丈も候を用ひ、その頭へ横に木結て、三角の形に縄を張り、網のごとく縄を縦横にし、紙手きりかけ、その三角の角ごとに杉の葉、笹の葉など束ぬるなり。これは亡魂の三年まで、それより七年、十三年と年回ごとにするか、あるは年ごとに立る家も候。一町に三處、四處は必おし立候故、黄昏に高より望めば、星の林とも見え候。是は朔日より晦日までに候。

またこのような諸記録でさらに注目すべきことは、『秋田領風俗問状答書』も、そして柳田の踏まえた文書でも、こうした「高灯笼」（花巻では「灯笼木」）が灯っているさまを、「其光の暗夜の星の如くなるを賞でた」や「黄昏に高より望めば、星の林とも見え候。」などと表現していることである。

あるいは、高灯笼（灯笼木）の灯るようすを星に喩える、という言い習わしがあったのかも知れないと考えたくもなるが、既に近世にこのような見方が存在したことを指摘するに留めたい。

この「高灯笼」は、藤原定家の『明月記』にも記述のある、古くからの風習であることが知られているが、このことについておよび「盆燈籠」についての記述を、『仏教儀礼辞典』⁸⁾「盂蘭盆会」の項から引用する。

鎌倉時代には盂蘭盆の行事として万燈会が行われ、『吾妻鏡』第六、文治二年（1186）七月十五日の条に、盂蘭盆の時、勝長寿院では万燈会が行なわれ、二品ならびに御台所が参列された。これは二親以下の尊霊の得脱のためであるといっている。また『明月記』寛喜二年（1230）七月十四日の条に、近年民家では、今夜長竿の先に灯笼のようなものを付け、火を灯して先祖の供養をし、年々その数が増し、流星や人魂に似ていると記している。

盂蘭盆にはまた「盆燈籠」といって燈籠を精霊棚あるいは軒にともして精霊を供養する風習があるが、これももと亡霊来訪の便りとしたもので、亡霊が高いところから降りてくると信じられたために、長竿に吊して高く掲げたのである。これは鎌倉時代寛喜頃には、民間に長竿を立てて燈籠をあげることが行なわれており、その起源は古い。その後これが広く一般の風習となり、『甲陽軍鑑』には永禄七年（1564）七月十四日の夜に燈籠見物をしたことが記されている。

藤原定家の生きた時代には、流星は不吉なものでしかなかったはずだが、ここでも長竿の先の灯笼を星に喩えていることが注目される。また、後半の引用によれば、16世紀半ばには、見物の対象にもなっていた。それほどに普及した風習であったことになる。

つまり、花巻近辺の風習と推測して調査を始めた「灯笼木」は、「高灯笼」とも呼ばれる、遅くとも中世から伝わって、広く日本中に存在した旧盆の風習であったといえる。

8) 藤井正雄編 東京堂出版 昭和52年（1977）

盛岡の七月七日行事「万燈会」について

花巻近辺の旧盆行事の記録では、七月七日は盆行事の開始日であるとともに、子どもたちの水浴する日でもあった。また「七夕」の行事の復活なども記されていた。しかし、「七夕」がどのような行事であるのかを記さない。記録者たちには自明のことであったのかもしれないが、現在の花巻の夏から秋の主要行事は「花巻祭り」であり、それ以外について知ることがない論者としては、賢治の生きた時代の七夕行事を知るために、花巻の北にあたる現在の紫波町出身で、明治30年代に第一高等学教授（後に校長）であった菊池寿人の残した『杏蔭日記』⁹⁾から、そのころの紫波郡の七夕を知る手がかりを得たいと思う。

(明治三十三年七月三十一日)

この夜（旧七月六日）、仙台の七夕祭を見る。いと賑なり。竹竿に五色の紙をかくること諸国の風に異ならねど、紙もて衣服の形を造り、いくつともなくぶら下ぐるは珍しき習はしなり（大きなは三尺にあまれり）。又魚、獣、人物など様々の状したる燈籠をつくりて燈を点ずるなど、よそにては見ぬ風なり。但し我が郷里の如く巨大なる燈籠を各町競ひ作りて市中を練り歩く事はなきやう也。且つ我が郷里にては七日夜の行事なるに、ここにては六日に執行するは如何なる故にや、此の風諸国に多きやうなれど覚束なき心ちす。

この時菊池寿人は仙台にいて、当地の七夕行事と郷里の行事とを比較しているのだが、これによれば、郷里の紫波では、七日の晩に町内ごとに大きな灯籠を作って、町中を練り歩いていたことになる。

この行事は、大正14年に発行された『紫波郡誌』¹⁰⁾にも以下のように記されている。

七日はなぬか日即ち五節句の一なる七夕祭にて三日頃より青竹に五色の紙を結びて各戸の軒に立て、祝ひ、素麺などを食す。又小児は萬燈を持ちて村内を囃し廻るものである。此の日七回食をなし七回水泳をなすなどの諺もあり。墓掃除井戸浚をなし燈籠柱を建てる。

こちらの記述では万燈の大きさはわからないが、菊池寿人の感覚では、当時の仙台の七夕につけられた灯籠よりは遥かに「巨大」と感じられるものだったことになる。

しかし、このような行事は実は紫波にだけあったのではなく、盛岡でもつい最近まで「七夕万燈会」とよばれる行事があり、子どもたちが「万燈」という灯籠を作って町内をめぐっていたのである。2004年現在では行なわれていないが、『図説盛岡四百年』¹¹⁾ 下巻Ⅱ（明治・大正・昭和編）には、昭和32年までの万燈会の写真が掲載され、上野正一郎『千條庵雑話』（昭和38刊）からの引用として以下のような説明がある。

自分は、明治十八年の生まれ、そのころの七夕行事を回顧すると、三文店から買ったいろ

9) 藤井茂著 菊池寿人先生伝記刊行会 昭和59年（1984）に所収の日記本文。以下の引用も同じ。

10) 岩手県教育委員会紫波郡部会 大正14年（1925）

11) 吉田義昭・及川和哉編 郷土文化研究会発行 平成4年（1992）

紙を短冊型やしきし型に切り、それに天の川などと書いたものをにぎやかにササ竹につけて、町家、ことに町はずれに行くに従ってその数が多く軒先に立てたものである。

長さは下屋根から一、二尺、高くて三、四尺がせいぜいであった。そして今の仰々しさと異なってまことに素朴で、道路に垂れることなどはなかった。竹もいまのようなカラ竹はなくて、裏山から切り取ってきた地竹が多かった。

同時に少年……ガキどもの遊びとして「万灯」があった。万灯は大きいになると、五重、七重のものもあったが、子どもらのものはせいぜい三重どまりであったようだ。これは武者絵などが描いてあり、それを三人から五、六人ぐらいの子どもたちが一団となって持ち歩き、目ざす家の門前に立て、太鼓を打ちながら後記の歌をうたい、万灯を持たぬ子どもらは万灯の周囲を走り回り、それが終ると代表者……ガキ大将がその玄関をおとずれて「七夕サンサ、おはつ、お上げエってくなんせ」というと、家の中からろうそくまたは白米、あるいは一、二厘のビタ銭をくれる。これを次から次へと繰り返していったものだった。

確かに同書に掲載されている昭和初期の写真では、七夕飾りはそれほど長いものではない。また子どもたちの一団は、現在のさんさ踊りで使用するような大きな太鼓を胸前に括り付けたもの（これは大人である場合もあるらしい）が二名、その後を二重や三重の万灯を掲げている子どもたちが十人に満たないほどで続いている。

彼らの持つ万灯は、写真で見える最小のもので、サイコロ状の立方体を横に二つ並べた上にもう一つを重ねた形、つまり全体としては三角形に見える形態である。これが二重の万灯で、昭和初期の写真では、最大のものでも三重のようである。

盛岡の万灯は子どもが主体の行事であったが、おそらく紫波のものは町内あげてのものだったので「巨大」になった、つまり五重や七重になったと推測することができよう。

明治29年に生まれて、学生時代を盛岡で過した宮澤賢治は、故郷の花巻にも同様の行事があったかもしれないが、上に引用した文の著者である上野正一郎氏が語る盛岡の七夕を知っていた可能性が高い、と言ってよいのではあるまいか。

何よりも「七夕」は、「星祭り」とも呼ばれる行事であった。『銀河鉄道の夜』の「銀河の祭」と、伝統的行事である「七夕」に共通性はあまり感じられないにしても、このような子どもの行事の側面から見れば、似ていると言えるのではないだろうか。

この、盛岡の子どもたちの行事である「七夕万灯会」の万灯が、『銀河鉄道の夜』の少年たちの烏瓜の灯に姿を変え、家ごとの七夕飾りは、ジョバンニの住む町の街燈を包む緑の木の枝へと変身したのではないかと考えるのである。

そして七夕は、盆行事の開始を告げるものであった。これに引き続いて、前述した灯籠木や灯籠などが各所に立てられ、光にあふれる行事が展開されたのである。

先に引いた菊池寿人の日記をもう一度借りて、旧盆の頃の風情を山の上から見るようすを確認してみよう。

(明治三十九年九月二日)

今日は二百十日といふに、いと珍しくおぼえて、我知らずうかれ出でたるが、酔に乗じて登るともなく城山に登りぬ。路はあしけれど草葉の露はまだ繁からず、やがて山上に登り立ちたる時の心ちは、幼き頃此里に生ひ立ちたる身にもまだ知らぬ所なりき。煙るが如き麓田の趣、独り夜の色を誇りげなる北上川の眺めなどは言はずもがな。年豊かにして民の喜び大方ならずと聞けるもしるく、遠爾の村々にて打ちなす「豊年太鼓」の音の、或は高く或はか

すけく、四面斉しく響き来るなど身にしみて覚ゆるに、いづれの里ぞ（星山村か）田の面に立てつらねたる百八の燈籠、薄靄を破りて希望の光あざやかに（これは孟蘭盆ゆゑなれど豊年ならねば催さぬ事也）、対岸なる鎮守の杜（館山神社）よりはさんさ踊の声さへ勇ましく水を渡ってとよみ来るなり。

この日の前日の一日には、「孟蘭盆とて一家うちつれて善念寺の先塋に詣づ。」とあるので、二日の風景も盆のさなかのものである。この年は豊作であったために「百八の燈籠」がさらに加わって、孟蘭盆の夜がいちだんと明るかったことがわかる。このような風習が、賢治が10才であるところに近隣にあったとすれば、同様のものを彼も見えていた可能性があるだろう。山上から里の風景を見るこの時の菊池寿人の心情は、『銀河鉄道の夜』のジョバンニのそれとは遠く隔たっているが、しかし眼下に見ていたものようすは類似していた、と言えるのではないだろうか。

「ケンタウル祭」の基盤となるもの

こうして、花巻から盛岡にかけて、かつて行なわれてきた旧盆の行事を総合的に見てくるときに、『銀河鉄道の夜』のケンタウル祭との共通性は明らかであると思われる。

最初にまとめたケンタウル祭の特徴と、旧盆の特徴とを対比してみれば、次のようになる。

- 1) 【ケンタウル祭】子どもたちが、烏瓜をあかりとして川に流す。
【旧盆行事】七夕万灯会で子どもたちが万灯をもって町内を回る。盆の終わりに灯籠流しをする。
- 2) 【ケンタウル祭】それを川岸で見物する人々がいる。
【旧盆行事】灯籠流しは皆で見物する。
- 3) 【ケンタウル祭】家ごとに「いちる」やヒノキなどの木の枝で飾りをつける。また、飾りには灯りもともされる。
【旧盆行事】七夕では、家ごとに七夕飾りをする。盆中には家にも墓にも灯が賑やかにともされる。
- 4) 【ケンタウル祭】祭りは、「星祭」とも「銀河の祭」とも呼ばれている。
【旧盆行事】七夕は「星祭り」とも呼ばれる。
- 5) 【ケンタウル祭】（空の星を見る。）
【旧盆行事】（本来七夕は「星を見る」行事）
- 6) 【ケンタウル祭】「川へはいる」または、入ってはいけない。
【旧盆行事】七日に子どもたちは水浴する。

このほかに付け加えるとすれば、「灯籠木」や「高灯籠」と言われるものが、星に喩えられることがあったらしい、と言うことになる。しかも注目すべきなのはその形状と、『銀河鉄道の夜』の「三画標」との関係である。

高灯籠の形状は、『秋田領風俗問状答書』が叙述するように「三角の形に縄を張り、網のごとく縄を縦横にし」と、長竿のてっぺんの部分に三角形が付いていると見えるものであった。同書につけられた絵¹²⁾では、この三角形の底辺にあたる横木に二つの灯籠が吊されているので、

光が三角形を形作るものではないが、これは『銀河鉄道の夜』の各所に現れる「三角標」と、何らかのかかわりを持つものではないだろうか。

三角形は、「七夕万燈会」の万燈のおおよその形態でもあった。こちらは、遠くから見た時に三角形の発光体とも見られたであろう。このように見ると、いわば旧盆の行事のそこそこに、三角形の光輝くものがあった、とも言える。

一方で、『銀河鉄道の夜』の「三画標」については、これを漫画化しますむら・ひろし氏が(漫画化する以上当然のことではあるが)その実態が何であるのか、大変な労力を払って追求している。様々な可能性を追求しているのだが、たとえば文庫判『銀河鉄道の夜』¹³⁾のあとがきでは天気輪の柱の丘でジョバンニが見たであろう夜空の時期の考察から、以下のような推論に辿りつく。

琴座のベガ、鷲座のアルタイル、白鳥座のデネブ、これは夏の大三角形だ。

「この三角形…。夏の夜空に浮ぶこの星をつないだ三角形から、三画標は想像されたんじゃないか。」

そしてぼくは作品をねちねち追って来たため、ジョバンニがこの丘にいる時刻は夜の八時前後と推定し、星座盤の夜の八時を見ると、何と八月二十日あたり。

「これは、お盆ではないか！ 死者が彼岸から帰ってくるあの時、現実と彼岸がつながる時…。」

僕はすーっと血の気が引くのを感じた。

宮沢賢治は、意図的に、星の位置によって、舞台がお盆であることを知らせた。そしてそうした季節の空に浮ぶ夏の大三角形。〈三画標〉とは、この星の作る形から想像されたものではないか。

『銀河鉄道の夜』にあらわれる様々な事物がそうであるように、〈三画標〉も賢治が実際に見て知っていたいくつかのものの複合したイメージからなっていると私は考えるのであるが¹⁴⁾、〈三画標〉を形作ったもの、ひいては『銀河鉄道の夜』を成立させた基盤には、ますむら・ひろし氏のこの推論も参照して、やはり盆行事があった、とは言って良いのではないだろうかと思う。

しかし、問題はなぜ「ケンタウル祭」なのか、子どもたちの叫ぶ「ケンタウル(ス)、露をふらせ。」という「決まり文句」は何であるのか、ということである。

ジョバンニが〈昼〉で見た時計屋のウィンドーには、たしかに「銅の人馬」がゆっくりと廻っていた。しかし、これはむしろ「ケンタウル祭」がはじめに存在して、物語に呼出されたものであると考えるべきであろう。

ところで「大正六年四月」の日付をもつ歌稿に次のようなものがあり、少なくとも大正6年ごろから「ケンタウル祭」のイメージが賢治の中に芽生えていたと推測される。¹⁵⁾

12) 2004年夏に青森・岩手・秋田の三県で共同開催の「描かれた北東北」展に展示されたものを実見した。

13) 扶桑社文庫 1995年3月

14) 「明治44年1月より」として、岩山の「三角標」を詠み込んだ歌がある。文庫版全集第3巻19ページ。

15) ちくま文庫版宮沢賢治全集第3巻 140ページ

わがうるはしき
ドイツたうひは
とり行きて
ケンタウル祭の聖木とせん

しかし、この歌稿では「ケンタウル祭」にどのような意味がこめられたのか、このままでは明らかではない。大正六年ごろにはほかにも「あかきうで木をつらねたる 夏草山の でんしんばしら」の歌や、大正八年の「北上川」の長詩などに、『銀河鉄道の夜』の発想に類似したものがいくつか見られ、『銀河鉄道の夜』の起源と、初期詩篇・歌稿の世界の近さを感じさせられるが、今は措く。

「ケンタウル祭」に関しては今後も検討すべきだと考えているが、これまで花巻から盛岡の旧盆行事についての調査してきて、明確な根拠を示すことができないものの、論者としては以下のような推論にたどり着いている。

旧盆行事の中には、墓参だけでなくいわゆる郷土芸能の門付けも含まれている。たとえば、花巻近辺では鹿踊りや念仏剣舞などが行われ、特に新盆の家や墓で、死者の霊を慰めるために門付けが行われることが通例であった。『花巻市の郷土芸能』⁶⁾では、鹿踊りを以下のように説明している。

鹿踊りの由来は（中略）いろいろの起源伝説があり、それぞれ伝承由来の伝書巻物を伝えているところもある。

これを概括的に見る限りでは、心ならずも生命を失ったものの怨霊を鎮魂し、祖霊供養のものであることが知られる。

宮沢賢治は「鹿踊りの始まり」を動物童話として描いているが、地域社会の生活の中では、それが死者供養でもあることは当然認識していたであろう。

私は、旧盆行事の中の供養として行われる鹿踊りが、「ケンタウル祭」命名の起源になったのではないかと推測している。ケンタウル（ケンタウルス）は、ギリシア神話において人間と馬との要素を併せ持つ半神である。一方、鹿踊りは、人が「鹿（または、獅子）」の姿をして踊るもので、鹿の姿をしている間のその人は、半ば神のような存在である、とみなされたであろう。

また「ケンタウル（ス）、露をふらせ。」ということばは、農事暦などに関連があるのではないかと考え、岩手の言慣わしなどを可能な範囲で調べたが、該当するものを見出しえなかった。

菊池寿人の日記にあったように、年によっては旧盆が二百十日と重なることもあり、風まつわりの言慣わしの多い「二百十日」に、関連する行事に起源があるかもしれない、と思っはいるが、今後も引き続き調査が必要であると考えている。

これら未解決の事柄について、土地に関連するところが判明したとき、『銀河鉄道の夜』が踏まえていた岩手の文化がどのようなものであったか、そして『銀河鉄道の夜』がそれをどのように変容させたかを理解できるのではないだろうか。

終わりに

このようにして、伝統的な盆行事から出発した「ケンタウル祭」を背景に、ジョバンニは〈夜〉の銀河鉄道から帰還する。しかし、戻ってきた時の彼の目に入る「川」には、今度は銀河がそのまま二重写しにされている。

魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせはしく行ったり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れてゐるのが見えるのでした。

下流の方は川はぐーばい銀河が巨きく写ってまるで水のないそのまゝのそらのやうに見えました。
(297ページ)

さう云ひながら博士はまた川下の銀河のいっぱいにつつた方へじっと眼を送りました。

(298ページ)

〈夜〉の世界に移行する直前とは逆の状況と言っても良いだろう。こうして、もう一度「川」と「空」を反転させて、いわば構造的にも鏡の中の世界を確認しながら、『銀河鉄道の夜』はその世界を終了するのだ。

冒頭にも触れたように『銀河鉄道の夜』に関する考察は既に膨大な蓄積があり、この上何か加えるべきものがあるとは思えないほどである。しかし、再読してやはりわからないことはあまりに多く、しかもそれが「読者の自由」に委ねられていたかどうかは疑問であると感じ、このような考察を試みた。

また多くの論が、『銀河鉄道の夜』の成立を大正二年の妹の死と関連させて説くが、たしかに妹の死と葬送や納骨など、ひき続いて催されるさまざまな死者を送る儀式とともに、翌年の新盆行事が深い印象を賢治に与えたと推定して良いかもしれない。以上の考察は、むしろそれを裏付けるものであると考える見方もあろう。しかし、ある特定の年の盆行事が『銀河鉄道の夜』の背景になっている、と確言することはできないと私は考える。

創作の始まりの時がそうであったとしても、「ケンタウル祭」と名づけたときから、おそらくは土地に固有の行事からの飛躍を志向していた、と考えるからである。

後記

ところで、盛岡近辺では今も八月になると「灯籠木」または「高灯籠」の今日的に変容したものが灯されている。地域のフリーペーパー「マ・シェリ」の記事¹⁷⁾を引用する。

お盆が近づくころ、盛岡市太田・飯岡地区付近を通ると、「この辺にピアガーデンがあったかな?」、一瞬そんな錯覚をおぼえてしまいます。その訳は、夏の夜空に輝くピラミッド型の

17) 盛岡とその周辺地域に配布されている。記事は410号(2002年8月1日)による。

電飾。家々の屋根に赤や黄の電球がいくつも連なるさまは美しく、特に東北自動車道の車窓から見るそれは、思わず声を上げてしまうほど幻想的ですからあります。

実はあの電飾は、お盆の風習「迎え火」のひとつで、「高灯籠」と呼ばれるもの。

迎え火には、48本の竹にろうそくをつけて墓所までの道端に灯すという二戸地方の「四十八灯籠」や、杉の葉のかたまりを竿の上に結んで、提灯とのぼりをつけた遠野地方の「灯籠木」など、地方ごとにさまざまなスタイルがあります。

ではなぜ、太田、飯岡地区は電飾なのでしょう？ 盛岡市下太田で電気店を営む藤原吉三さんによると、「今から37年前、私が始めたのがきっかけだと思いますよ」。なんとあの迎え火は、お寺でも仏具店でもなく、地元の電気店が一軒ごとに作っているものだったのです。

もともと太田地区には、新盆から3年間は48個の小さな提灯を門前から玄関まで下げるといふ迎え火の風習がありました。しかし、ろうそくの火が提灯に燃え移ることも多く、危なくて目が離せなかったとか。そこで、火を使わない安全な迎え火の方法として考え出されたのが、あの電飾だったというわけ。

「敷地が広ければ、門前から玄関までの両側につけるし、余裕がなければ、屋根の上にピラミッドのように張ります。ちょっとでも高く目立つようにすれば、新しい仏さんでも迷うことなく帰ってこられるでしょ？」。あのピラミッドスタイルは、現代のコンパクトな住宅事情に合わせた苦肉の策だったのですね。

「よその家で上げているのを見て、きれいだからウチもと、だんだん広がっていったんですよ。今までに200軒くらい取り付けたでしょう？」

最近では、雫石や矢巾、石鳥谷方面にまで広がりを見せ、盛岡の夏の風物詩ともなった、現代版迎え火。みなさん、どうぞ「ビアガーデン」と勘違いなさいませぬように。

実際、十年以上以前の夏の夜に、東北自動車道を北上から盛岡へ北上する際に周囲に点在するこのイルミネーションを見ながら、「この風景は何かを思い出させる」と強く感じた。そして、思い起こしたかった何かとは、『銀河鉄道の夜』だったのである。この論考は、その時から完成することを志したものである。

このほかにも、東北には年々華やかさを増す夏祭りが多く、竿燈やねぶた・ねぶたなどその中心には「高灯籠」と起源を同じくする祖霊供養の灯籠がある。このような近年の変化を、宮沢賢治は歓迎するのだろうか、とふと思う。

付記

この考察は、文部科学省科学研究費平成16年度萌芽研究「宮沢賢治の文理融合的総合的研究—いのち(生命)・こころ(心象)・うた(詩歌)—」(研究代表山本昭彦)によるものである。